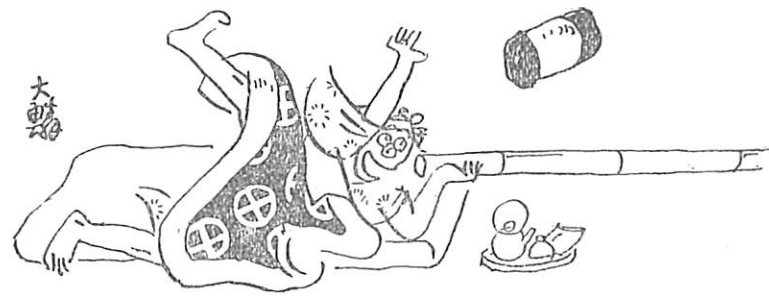


あまり待たぶれて、のぼせて来たので、フイと立上ると、腰から下は湯で眞赤で、上半分は湯氣で黄色になつた、若旦那の身體が赤と黄色の染みみたやうな案配になりました、ハ、ア之はおもよは、今日は髪を結ふ日で、髪結さんでも来て居るのやろう、屹度其うや、それで恠ないに暇が取れるのやろ、よし、そんなら、御飯を食へ出したら、お給仕に出て来るに違いない、モウ髪も結へた時分であるよつて、と湯から上つて自分の御居間へお通りになりますと、モウ溫い御飯に御馳走がチャンと揃ふて居る、ボン／＼（手を打つ音）「コレ／＼御飯を食べるさかい、お給仕に来てお呉れ……、コレ、誰も居んのか、お給仕に来てんかいな」「ハ―イ……お竹どん、若旦那のお居間から、お手が鳴つてるのお給仕やシ、お前はんチョツと行てお出でやす」「わたい、いやゝし、若旦那のお給仕は誰か行つてもお氣に入らんやし、直におもよをおこせと、おつしやるよつてな……」「そないに云やはつたら、おもよどんをやつたらエ、やないか」「そやけども、おもよどん居てやないやないか」「代りのおもよどんがあるわ」「ハアハア、アノ化物をか、そうやなア、チ



ヨツト遣つて見よか、まアどんなものが出来るか遣つて見まよ……アノおもよどん、おもよどん「ハ―イ、呼ばはツたかの」「それ、いつもお前はんに話をして居るやろ、家の綺麗な若旦那、九州から今日お歸りになつたのや、いま御飯を召上るので、お前はん、お給仕にいてお出で、まへのおもよどんは、若旦那のお氣に入りやつたんやし……、その氣でお前はんも行くのやし、サア早う行てお居で」「ハ―イわしが行きますかの……」多少そゝのかされたところへ、年が十八ですから色氣があるよつて、おもよさん、自分の部屋へ飛込んで、大急ぎで化粧をしたンですが、實はまだ塗らん方が餘程よかつた、何しろ常に塗らんところへ、大急ぎで塗つたものですから、赤いところ、白いところ、黒いところ、まんだらに成つて、何の事はない、焼残りの藏みたい顔して、口へは紅を唇一ぱいに付けたので、青光りに光つて、ブン／＼の背中みたいな、喋ると涎で、紅が流れて口の周圍は眞赤いけ、お盆を横抱へにしてやつて来ました「ハイ、これは御當家の若旦那さんでござんすか、まアようお戻りなされましたのオ、お留守中に來ましたア、わしがお、おもよでござんすが、皆がのう、若旦那さんは、よか男ぢや、よか男ぢやと云わツしやるによつて、一體どないよか男や知らんと思ひよつたが、ホーンにお主はうつやかな者ぢやてのオ、これなら前のおもよさんが惚れたちうのも、無理はない、わしがサモ、オツ惚れまうしたがお、今飯食ふちう事やで、お給仕に來よつた、サアウーンと食はつしやい、わしいくらでも盛りますべいから……」「何んやア、これは……、お竹――、お